

「競争研究」は何を残したのか

—大阪支部「競争研究」4年間の軌跡—

前田 雅章（相愛大学）

1. 「競争研究」は何を残したのか その1

(1) 大阪支部「競争研究」の前夜

1991年同志会全国大会埼玉大会、教育課程分科会で出原泰明さんが「教育課程試案」を提案。この提案は「教材はあくまでも教育内容を教えるための手段であり、教育内容を先行させて、それに応じて相応しい教材が選ばれるという従来とは逆の発想を提起する画期的ものであった」(注1)。翌年1992年の知多大会の全体基調提案で、その試案が発表された。その中で三つの柱(①「スポーツ文化の発展」論②競争・勝敗③技能、技術、戦略、戦術)が体育の教科内容の全体構造を示すものと強調され同志会全体が「教科内容研究」に足を踏み込んだことになる(注2)。知多大会を主管した愛知支部は大会終了後の支部総会で「とび箱運動研究」をすることを決定した。ただ、この知多大会を契機に「教科内容研究」を意識した実践や研究が支部や個人で出てきたものの、同志会全体で「教科内容研究」を研究の柱として深化拡大していく機運ではなかった。

1993年9月発刊した「体育実践に新しい風」(注3)の序章で、出原さんは「教科内容研究と授業改革」を訴えているが、同年12月冬大会では、「体育教育における技能習熟の教育価値」(注4)の重要性を主張する進藤省次郎さんと論争があるなど、まだまだ出原さんの主張が同志会全体に浸透していなかった。

転機は、1994年4月「たのスポ」が季刊から月刊化されてからである。当時の同志会全国委員長であった出原さんが強力に牽引され

「たのスポ」月刊化が実現した。この月刊化は同志会研究が技術指導の系統性研究から教科内容研究に踏み込み研究・実践の幅を広げていく契機となった。この号から「教科内容研究論」(注5)の連載が始まり、出原さんが「今、なぜ、教科内容研究なのか」を執筆している。

(2) 大阪支部が「競争研究」に向かったのは

結論から言うと、同志会の研究が技術指導の系統性研究から教科内容研究に舵を取った頃、体育の教科内容の柱の一つとなる「スポーツの競争」を、どの支部も正面から取り扱わなかった、つまり研究・実践の対象としなかったからである。

前述した「出原・進藤論争」があった1993年冬大会で、出原さんから「大阪の学習レベルは著しく低下している」(注6)、「大阪支部の研究レベルが低下している」(注7)と指摘された。

なかなか教科内容研究に踏み込まない、踏み込めない大阪支部への出原さんの挑発的な叱咤激励が影響したこともあり、94年9月大阪支部総会で、支部研究方針を教科内容研究に決定し、支部の総力をあげて集团的にこの研究に取り組むことになった。

なお、この年の冬大会には個人の取り組みであるが、牧野満さんが「平泳ぎはなぜカエル足か」、中川孝子さんが「水泳にも生い立ちがあったんよ」と、歴史・文化研究に基づいた実践を報告された(注8)。

しかしながら、教科内容の一つの柱「競争・

勝敗」については同志会全国を見回しても、だれも手を付けなかった。出原さんはすでに85年大阪の全国大会の「走分科会」入門講座で次のように述べている（注9）。

“記録”と“競争”を教えること。“技術”は教えてきたが“競争”は教えてこなかった。技術と記録を媒介にして仲間と競争することの意味を教えてこなかった。“記録”と“競争”の意味を教えることは、とりもなおさず今日の課題。学習指導要領では、“記録”と“競争”は「態度の問題」と考え、「正しい態度」がすでにあり、それを子どもに従わそうとしている。この指導は「訓話」である。

記録や競争は文化としての陸上競技の重要な構成部分。そのため記録観や競争観という「ものの考え方」を内に含んでいる。私たちは「運動文化の主人公」をつくるため、この「ものの考え方」を「訓話」や「説法」ではなく科学として指導する展望が見えてくる。このような展望は「夢物語」でしょうか。課題が大きすぎる。“泥沼”です。しかし、はじめは“泥沼”でももがいているうちに新しい峰が見えてくる。

この入門講座は、この時期前後の走運動分科会入門内容から突出していた。まさに当時は「競争」・「勝敗」を教えることは、「課題が大きすぎる」「夢物語」だった。

それから9年後、大阪支部は、この「夢物語」に手を付け「泥沼」に入り込むことになる。果たしてもがいているうちに「新しい峰は見えて」きたのだろうか。

【注】

(1)「教育課程分科会の成果と課題」森敏生さん（1992年知多大会提案集教育課程分科会基調提案 P218）

(2)「明日を生きる知恵と力を育てる体育実践を創り出そう」（1992年知多大会全体基調報告 P12）

(3) 1992年冬大会で報告された「サッカーの教科内容を戦略、戦術」とした「88時間のサッカー実践」（山本雅行さん）も掲載されている。

(4)「体育科教育における技能習熟の教育的価値」進藤

省次郎さん（1993年冬大会提案集特別報告 P9）

(5)「教科内容研究論」出原泰明さん（たのスポ 1994年4月号 P38）

(6)「冬大会報告」楠橋佐利さん（大阪支部ニュース 214号 94年1月）

(7)「巻頭言」船富公二さん（大阪支部ニュース 218号 94年5月）

(8) 1994年同志会冬大会提案集

(9)「走運動分科会入門講座」出原泰明さん（1985年学校体育研究同志会全国研究大阪大会提案集 P15）

2. 「競争研究」は何を残したのか その2

(1) 「競争研究」のプロローグ

1994年9月の研究体制から「競争研究」が開始された。9月号の支部ニュース巻頭言は当時支部長の山本雅行さん。「体育に求められる教科内容とは」と題し、「体育の教育内容不在が教科としての体育の社会的存在基盤を危うくさせている」と警鐘を鳴らす。そして「単なる技術屋さん」に留まるのではなく、スポーツ文化の研究が必要であり、そのためにも「たのスポ」を皆で学習し、あるべき体育の授業の方向を探ろうと呼び掛けている。

続く支部ニュース10月号では、当時豊能ブロック三浦正典さんの巻頭言。これも「教科内容研究と授業づくり」として、久保健氏の「現代科学の膨大な蓄積から教科内容を選択・編成する決め手は社会的必要」を引用し「惰性に流されそうになるが、学級づくり授業づくりにがんばりたい」と教科内容を意識した授業づくりの決意を語っている。

この年度から研究局長は安武一雄さん、研究部長は前田、次長は楠橋佐利さんと新体制となり、安武さんは「これまでの一年サイクルの研究ではなくて二年三年という長いスパンでじっくり実践研究を積み上げていきたい。大きなテーマとしては『小学校における教科体育で教える中身＝小学校

『体育における教科内容研究』をすすめる」(注1)という研究局方針を述べた。また、前田も研究部方針で「今年の研究のメインは体育の教科内容とはいったい何かを探り、支部内の教科内容、教材などの概念の一致をはかりたい」としている。

その記念すべき第1回支部例会(1994年10月22日)のテーマは「教科内容とは」で内容は以下の通りであった。

- ①他教科(国語、仮設実験授業)における教育内容研究について(安武さん)
- ②同志会の教科内容研究について(楠橋さん)
- ③教科内容研究における概念整理(前田)
- ④小低体育の教科内容研究について(山本英子さん)
- ⑤研究部提起 一つの実践構想 小学校3年鉄棒(安武さん)

従来、実践・実技提案のない例会はほとんどなく、この例会の持ち方で論議になるか心配であったが参加者から様々な意見や感想を引き出すことができた。しかしながら、「教科内容は子ども研究から論じられるものではない、いや、まずは子ども研究からだ」などの意見が続出、結局まとめきれずに時間切れとなった(注2)。「競争研究」の船出は、前号に書いたように、まさに「夢物語」に手を付け「泥沼」に入り込んだ。

(2) 教科内容と教材・教具の関係

当時、出原泰明さんは「栓抜き体育からの脱却」と言い続けていた。体育は瓶の栓を抜く(上手くする技術)ことばかりを伝えてきた。理科では栓を抜くときの「てこの原理」という科学的概念が教科内容になる。体育でも教科内容と教材の峻別という視点が重要であり教科内容研究が必要になってくるという。当初、私は出原さんがいう「栓抜き体育」の意味がよく分からなかった。体育とは栓を上手に抜く技術(子どもたちを上手くする)を

教えることが第一義という観念から抜けきれなかった。

しかし、他教科、特に自然科学の分野ではこれは常識になっていて、他教科では私たちは「教科内容と教材」を分けて授業づくりをしている。

「授業とは文化内容を扱う『教材』を媒介として『子どもたち』が相互作用しつつ、文化内容を獲得し学力を形成していく過程である。そして、教師が教材を介して子どもに働きかける過程は、教育目標・教科内容、教材・教具、教授行為・学習形態、教育評価の四つの次元に分節化」でき「教材とは子どもが学習する直接的対象となる具体物・特殊な事実・事物・事件・現象であり、教具とは、その教材の物化された部分を指す」(3)。

この見地に立って、具体的に算数の授業事例をあげてみると、足し算の繰り上がりの仕組みが原理・概念であり、それが「教科内容」になると、タイルが「教具」で、そのタイルを操作することで起こる現象が「教材」になる。このように算数では、教科内容を教材・教具で教えるという立場がはっきりしている。それでは、体育では教科内容、教材・教具の関係を具体的な授業場面に当てはめてみるとどうなるか。

マットの側転の授業では側転の手や足の着き方(直線型・山型・逆山型)の認識と技術が「教科内容」となり手形足型は「教具」で、これを使って子どもたちに側転という具体的な現象が「教材」になると言える。このように教材と教科内容を峻別することで、体育でも技術以外の文化内容も教科内容となり、授業づくりの幅が広がる。

中村敏雄さんは「特に教材(を)教えるということだけで教育実践が成り立つと考えることは教材の矮小化と教育実践の貧困化に陥る」(4)と言い切っている。

【注】

(1) 支部ニュース 223号 1994年10月

(2) 支部ニュース 224号 1994年 11月

(3)「学力を育てる教育学」(石井英真)八千代出版 2008年 P107

(4)「教師のための体育教材論」(中村敏雄) 創文企画 1989年 P148

3. 「競争研究」は何を残したのか その3

(1) 「競争研究」は集団研究の賜物

1994年度から1998年度まで5年間、「競争研究」は続けられるのだが、毎年度きちんと研究報告を残している。それも大阪支部内に留まらず同志会全国に向けて研究内容をまとめ発信してきた。94、95年度は安武一雄さん(1)、96、97年度は前田(2)、98年度は澤口雅彦さん(3)が研究をまとめ報告し、この2年後、楠橋佐利さん(4)が5年間の研究を振り返っている。一つの研究を4人ものメンバーで代わる代わる報告してきた。いかにこの研究が集団で取り組まれたかを物語っている。さらに2014年には再度安武さん(5)が登場し「競争研究」の足跡を整理し振り返り、一つの結論を引き出している。大阪の支部研究は、今すぐ生活課題にかかわらない、または技術以外の「競争研究」のような「教科内容研究」と授業づくりを、集団的集中的に数年かけて行う必要もあるのではないかと。

(2) 「競争研究」の流れ

「競争研究」5年間は、重なりはあるが、取り組み内容で大きく三つに分けられる。

①文献研究期(6)

②実践模索期「とりあえず実践」(7)

文献研究だけをしても実践の構想がわからず、当時の研究部が「競争」に関して、とりあえず思いついたことを実践した。

・安武さん・マット実践(8)

・楠橋さん・ハードル走実践(9)

・牧野さん・リレー実践(10)

③実践構想と実践化期

・佐々木盛文さん・混成競技実践(11)

・伊藤知可子さん・丸太投げ実践(12)

・伊藤さん・ハンマー投げ実践(13)

(3) 「競争」を教えるとは

当時の私たち支部研究部は文献研究を進めて行く中、子どもたちに「競争」を教えるとは、いったいどういうことかをずっと論議していた。結論を一言でいえば、次のようになるのではないだろうか。

文化論的アプローチ(14)という研究方法・視点で、「内的競争・外的競争(樋口聡氏)(15)や「現象としての競争・認識上の競争(古城健一氏)(16)の知見を得て「競争の二重構造」を、また中村敏雄さんの一連のスポーツ文化研究から学んで、「時代が進んでいくほど、スポーツにおいて相対的に『競争』が占める割合が大きくなってきたこと(競争の先鋭化)」を、体育理論のような教室で教えるのではなく、体育実技を通して小学校の子どもたちに実感を伴って教えていこうということではなかったか。また、行き過ぎた「競争」に対して道徳的にしか否定できなかった教育現場に、新たな視点を持ちたかったかもしれない。

【注】

(1)・「競争」は教科内容になりえるか—94年度支部研究部研究報告—同志会全国研究東京大会「教育課程分科会」1995年8月P187

・「競争」を教えることへの問い—94年度大阪支部研究報告—「たのスポ」1995年10月号P21

・「競争」研究・2年目の報告—同志会全国研究阿蘇大会提案集下巻「教育課程分科会」1996年8月P159

・「競争」研究・2年目の報告—阿蘇大会注目の実践—「たのスポ」1996年11月号P34

(2)・「競争」を追い求めて—96年度大阪支部研究部研究報告—同志会全国研究愛知大会提案集「教育課程分科会」1997年8月P156

・「競争」の授業に挑む—1997年度大阪支部研究部報告—「たのスポ」1998年10月号P24

(3)98年度「競争」研究のまとめ—「K I C K O F

F」30号1999年7月P14

(4) 長編実践記録「競争研究を振り返って」 「運動文化研究」18号2000年11月P72

(5) 「1990年代大阪支部の競争研究は何を目指していたのか」 「たのスポ」2014年12月号P24

(6) この時期だけでなく文献研究は5年間継続

(7) 文献研究したものの実践化が構想できなかったので「とりあえず実践」して、そこから「競争」が「教科内容」になりえるのか探っていこうとした。ちなみに命名は安武さん。教育課程づくり教材配列表の「ちょっと並べてみた表」や「競争研究」の研究手法となった「文化論的アプローチ」も安武さんの造語。安武さんは造語の名手である。

(8) ・「得点」を通してマット運動の表現に迫る 「たのスポ」1996年4月号P32

・「採点基準作りを通してマット運動」の意味「たのスポ」1999年3月号P36

(9) えー！一位が3人！？—順位について考える「ハードル走」の実践—「たのスポ」2014年12月号P30

(10) グループづくりからのリレー実践(3年生)「たのスポ」1998年2月号P36

(11) 「混成競技をしよう」—50m走・ソフトボール投げ・立ち幅跳び—「たのスポ」1998年8月号P12

(12) 「丸太投げをしよう」の実践—スポーツとしての投競技を考える—「たのスポ」1998年8月号P16

(13) ・「ハンマー投げをしよう」の実践—スポーツとしての投競技を考える・パートII—「たのスポ」1999年3月号P22

・スポーツとしての投競技を考える「ハンマー投げをしよう」 「K I C K O F F」30号1999年7月P19

・長編実践記録「競争研究を振り返って」 「運動文化研究」18号2000年11月P72

・競争研究から生まれた実践—2年間にわたる丸太投げ・ハンマー投げの実践— 「K I C K O F F」38号2009年12月P15

(14) 競争観や勝敗観をという「ものの考え方」を直接教えるのではなく、「ものの考え方」の土台となる文化的・科学的な事実で、それを学ぶことでそれらの事実の関連や系統・構造などが見通せるものを追求していく方法。

(15) 「スポーツのルール・技術・記録」樋口聡1993年

(16) 「現象としての競争・認識上の競争」古城健一「体育科教育」1993年2月号・「学校体育」1995年2月号・「K I C K O F F」27号1996年6月P40

4. 「競争研究」は何を残したのか その4

(1) 「とりあえず」実践から「丸太投げ・ハンマー投げ」実践へ

前述したように、各研究部員が競争の文化研究から「とりあえず」競争を教えることをねらった実践を行った。それらを研究部は検討し、6つの競争の教科内容(1)をひねり出した。これを確かなものにしたと、全研究部員が実践構想から教具の準備、授業観察、検討、報告、そして総括と、総力をあげて取り組んだのが、「丸太投げ・ハンマー投げ」(伊藤知可子さん)実践である。

丸太投げ実践のねらいは①競技づくりを通して競い合う中身によってルールが変わることがわかる。②力比べから始まった陸上競技がどのように発展してきたかを学ぶ。であり、ハンマー投げ実践のねらいは①近代スポーツは競い合うためのルールを顕在化させていく中で競争以外のものをはぎ取って競争を先鋭化させていたことがわかる。②近代スポーツは初めからルールがあるのではなく競技が行われた場所や時代背景に限定されながら変化していくことがわかる。であった。丸太投げ実践は全16時間、ハンマー投げ実践は全17時間で両実践を合わせると実に全33時間と壮大なものになった。

丸太投げを発案したのは楠橋さんだった。子どもたちが競争を学ぶには、子どもたちの予備知識のないスポーツのほうが理解させやすいと考えた。そこでスコットランド・ハイランド地方の民族スポーツである「丸太投げ」を教材にしたのだ。教具の丸太は、楠橋さんの山林を所有する知人から譲り受け、それを1mに切った。

ハンマー投げでは、ハンマーという用具の変化を体験させようと、澤口さんと佐々木さ

んは、木のハンマー、パイプのハンマー、紐のハンマーと三種類のハンマーを手作りした。前田は、現代のハンマー競技で使用されている公式ハンマーを買ってきた。また、中川孝子さんは、スコットランド旅行の際、ハイランドゲーム（丸太投げ、ハンマー投げ）を実際に鑑賞し、その写真を授業に提供した。

しかし、何とんでもこの授業構想を授業として実現させた伊藤さんの誠実さと力量には、今でも頭が下がる思いである。

ハンマー投げにこんなすごい歴史があるとは思わなかった。丸太投げはほとんど発達していなくて残念だけど、そこはスコットランド人ということをとて大切にしていることだから、それでいいと思う。それに比べハンマー投げはどんどん発達して行って記録を伸ばし、なんか急ぎ過ぎだと思った。

授業まとめの子どもの感想である。伊藤さんが実践にかけた思いや願いが十分子どもに伝わっている。また、私たち研究部が追い求めてきた「競争を教える」ことを授業化できたのではないかと思いたい。

2009年3月伊藤さんの定年退職の際、12年前の実践の子どもたちが立派な大人になり多数集まって伊藤さんの退職を祝った。大きな話題は「丸太投げ・ハンマー投げ」だったそうだ。

（2）「競争研究」の広がり

当時の研究部は、研究や実践の進捗状況を提案集や「たのスポ」などを通して常に全国同志会のメンバーに発信していた。これに研究者が注目し、唐木國彦さんが「協同『を』考える」(2)、森敏生さんが「体育科教育における『競争を教える』授業の位置づけと展望」

(3)と私たちの競争研究と実践化に新たな視点を与えてくれた。また、ねこちゃん体操の考案者・山内基広さんが「器械運動で『共創』を教える」(4)の実践を提起するなど、他支部も大阪の「競争研究」に追随してきた。そ

れらに対して安武さんは丁寧な論評を必ず入れ大阪支部の「競争研究」の意義と意味を問い直し深めてきた。

（3）「競争研究」は何を残したのか

1998年長野大会の教育課程分科会で「競争研究」と伊藤さんの丸太投げ実践を報告した。分科会参加者で時間を延長した熱い論議となった。その晩の大レクで丸太投げの寸劇を行い、大好評であった。

現場教師、それも小学校の教師が、文献研究をもとに実践を創ったことに、海野勇三さん（当時山口大学）は、いたく感動、発奮して1998年12月「教育課程自主編成プロジェクト」を立ち上げた。全国から手弁当でメンバーが大阪に集まり5年の歳月をかけて2003年に「体育・健康教育の教育課程試案1」を、2004年には「体育・健康教育の教育課程試案2」を創出した。両書は「輝くシリーズ」や「新体育叢書」の導きの糸となっている。大阪の「競争研究」が投げた波紋が今や全国の同志会の研究実践に連綿と繋がっているとはい過ぎか。

5年間の「競争研究」を終え、大阪支部研究部は自分たちの集団研究に確かな自信を持つことができたのではないだろうか。その自信が、2005年同志会創立50周年記念全国研究奈良大会開催に挑ませたように思う。

それは、かつて私たちの先輩たちが「ポドテキスト集団研究」で培った力で1985年同志会全国研究大阪大会を成功に導いたことと重なっている。

【注】

(1)・98年度「競争」研究のまとめ 「KICK OFF」30号1999年7月P16（澤口さん）

・「1990年代大阪支部の競争研究は何を目指していたのか」「たのスポ」2014年12月号P28（安武さん）

(2)「たのスポ」1996年1月号P8（唐木さん）

(3)「たのスポ」1998年8月号P8（森さん）

(4)「たのスポ」1996年4月号P19（山内さん）